

<エッセイ>ある好角家の帰還

著者	牛村 圭
雑誌名	日文研
巻	54
ページ	19-24
発行年	2015-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00004045

ある好角家の帰還

牛村 圭

How I became a Sumo-enthusiast.

幼いころ夢中だったのに、やがて年齢相応に多事となり次第に関心が薄れていったものがある。その後何十年も経たのち、ふとしたことから遠い昔の関心事に立ち返ることがあるらしい、と思いいたっている。

小学生時代の後半、相撲に夢中だった。年六回の本場所開催中は、学校から帰ればテレビで大相撲中継を欠かさずに観た。ビデオ録画など思いもよらぬ時代であり、生中継しか楽しむ術はなかった。場所中の日曜午後、家族で繁華街へ出かけるときは、百貨店の家電売り場でのテレビ中継を気にしながら店内を歩いた。新潟市の海浜地帯に住んでいたため、本場所開催地は遠く、取組を直に観戦することなどかなわぬ夢だった。

夢中になるには、きっかけがある。この場合は、たまたまテレビで見た優勝決定戦、すなわち昭和四十四年七月の名古屋場所（横綱柏戸が引退を表明した場所でもある）の十二勝三敗の相星となった新大関清國と前頭藤ノ川の一戦だった。浴びせ倒して新大関が勝ち、次場所連続優勝すれば一気に横綱だ、と言われた（その秋場所、清國は麒麟児「のちの大麒麟」との一番で頸椎を痛め、その後の優勝はなかった）。それ以前、そこそこに相撲好きだった父が観ている本場所中継を横で眺めたことはあったが、さほど興味は惹かれなかった。しかし、この決

定戦を目の当たりにして、相撲は面白い、と初めて思った。

実践と「研究」に明け暮れて

こうして相撲の世界へと誘われたものの、惹かれたのは取組内容であり、この二力士のファンになったのではなかった。その一方、まもなくお気に入り力士ができた。好きな女の子の名を、少年はなかなか口にしないものだ。周囲が推測してはかかって、うつむいて口を閉ざす。同じように、熱烈なファンとなった力士の名は、ついぞ親しい友にも洩らすことはなかったし、半世紀ほどたった今でも記すのはやや気恥ずかしい。でも一寸だけ書いておこう……それは、まだ十代の童顔、若手のなかで初めて大鵬に土をつけ将来を囑望され、いざれ綱を張って四代目西ノ海を名乗るのでは、という期待もあった力士である。十才になったばかりの学童には、童顔のハイティーン力士は、なによりも親しみが持てたのだった。

テレビ観戦だけではなく、学校の休み時間には数名の友と体育館や廊下で相撲をとって遊んだし、一方、研究にも余念がなかった。といっても、全国紙のスポーツ欄に掲載される大相撲関連の記事、そしてなけなしの小遣いでたまに購入したベースボールマガジン社の月刊誌『相撲』を熟読する程度だった。『小学生新聞』ではなく大人の新聞、『相撲』という大人の雑誌、は言葉の学習にも役立つ。『土壇場で勝ちを拾う』、『大鵬の独壇場』、『土俵際まで押し込んだものの惜敗』などという表現を頻繁に目にして、語彙が増えた。もっとも、新聞の社会面の見出しに「北富士演習場」とあるので、当時大関から横綱にあがった北の富士関連の記事かと思えば、富士山麓の自衛隊演習場のことと分かり、拍子抜けしたこともあったが。

Out of sight, out of mind.

わが相撲好きは級友たちの広く知るところとなり、公害病をもじって、牛村は「スモウ病」患者だ、と揶揄された。学期末のお楽しみ会では、相撲好きの友と二人、寄り切りや下手投げなどの主要な決まり手や、網打ち、渡し込みといったやや珍しい決まり手を実演で紹介をして、「啓蒙」活動にもいそしんだ。頻繁に相撲を取って遊んでいたためか、四年生まではクラスで一、二を争う鈍足だったのに、五年になると普通に、そして六年ではリレーメンバーになるまでに進歩した。蓋し、相撲ごっこがアイソメトリックス的な筋力トレーニングに成り得ていたのだろう。

父の転勤で六年生の夏休みに県内の山間部へと居所を変えた。転校先でも早速、相撲を通して仲間ができた。ポートボールコートが優に二つ取れる大きな体育館が土俵となった。豪雪の冬でも、休み時間を終えると身体は暖かだった。卒業文集には何を書いてもよいというので、「相撲とぼく」と題して相撲との出会いや楽しさを綴った。出来上がった文集に目を通した両親が、「なんで相撲なんだ？ほかにも書くことはあっただろうに……」とややがっかりして訊いてきたことを思い出す。

顧みるに、卒業文集に一文を寄せたところが、わが相撲熱のピークだったのだろう。中学校へ進み陸上競技部での練習に明け暮れるようになると、もはやテレビ中継の時間に在宅はかなわなくなつた。先述のお気に入り力士の動向はチェックしていたし、「姥桜」とか「ポロ桜」などと揶揄されていた不振大関の琴櫻（しんやま）が、冬眠から目覚めたかのごとく連続優勝して横綱昇進を確かなものとした北の富士との一番（昭和四十八年初場所千秋楽）などは観る機会があったが、夜のニュースで主な取組結果を知ることくらいしかできず、次第に熱は冷めていった。愛

読雑誌が、『相撲』から同じ版元の『陸上競技マガジン』へ移るのと軌を一にしていた。

小学生のころの傾倒ぶりはなくなった。その後の、つまり昭和四十年代後半から誕生した横綱たちの名前を出されて、時系列に沿って並べよ、と問われれば、「正解」を出せる自信はあるものの、その程度の相撲好きへと墮ちて月日を重ねていった。気がつけば、いつしか自分と同年代の元力士たちが、日本相撲協会の要職に就く時代になっていた。

二人の玉治郎

五、六年ほど前のある日のこと、テレビのスイッチを入れると、大相撲放送の時間帯だった。力士たちが格段に大柄になったと感じながら画面を見ていると、聞き覚えのある懐かしい声が館内に響くのが聞こえてきた。アナウンサーは、「玉治郎の軍配が返った」と言っていたと思う。この瞬間、一気に時を遡り、昭和四十年代に戻った気がした。懐かしい声の主は木村玉治郎きむらたまじろうという行司、小学校に通う児童だったあのころ、大のお気に入りだったあの行司の名だった。もちろん、大正末年の生まれだった当時の玉治郎は、その後出世して、式守伊之助しきもりいのおすけそして木村庄之助きむらむさしのすけという立行司たてぎしとなり、定年を迎えて角界をとうに去っていた。目の前の行司は同じ玉治郎ながらも、体軀はあの玉治郎より二回りは大きく、風貌はかつての式守伊三郎しきもりいさぶろうを思わせた。だが、取組をさばく所作、そして小気味よいかけ声は、四十年前の玉治郎と瓜二つなのだった。

きらびやかな装束を身にまとい取組をさばく行司たちの姿を観るのも、子どものころの楽しみだった。手製の軍配ぐんぱいを作り、柄の部分の先に毛糸を長目に取りつけ、端には房をつけた。結びの触れを口にする立行司の真似をするときには、その房を畳の床に垂らし、一人悦に入っ

ていた。日本史好きの学童でもあったので、行司の装束は大名の正装を想起させ、二重に好奇心を刺激した。そういう行司たちのなかでも、木村玉治郎の所作は格段に美しく、館内によく通る声には惚れ惚れした。十代前半の子どもでもできえ、抜きん出た行司であることは分かった。行司の世界は年功序列だったが、玉治郎の才は相撲協会幹部が認めるところとなり、先輩格二人を抜いて昇進していった。

こちらが大相撲から遠ざかっている間に、その木村玉治郎の名跡を継ぐ行司が現れていた（この二人の間にも玉治郎を名乗る行司がいたことをのちに知った）。名ばかりか、所作や発声までそっくりだった。早速調べると、年齢はこちらより一つ下、少年の日にあの木村玉治郎その人にあこがれて弟子入りしたという。昭和四十年代、日本のどこかで同じように木村玉治郎に魅了されていた少年がいたのである。そしてこの玉治郎行司、正しくは第六代木村玉治郎は、師匠である第四代を手本として所作や発声を研究していることをも知った。全くの偶然から気になる存在となった第六代の土俵さばきを何回か観るうちに、幼いころの相撲熱が少しずつ蘇っていくのを感じた。

バイオメカニクスを活用せよ

こうしてまた、機会ある限り大相撲中継を観戦するようになった。日本人横綱の誕生が待たれていることを、番組を観ていて痛感した。しかしながら、こういう立ち合いをしてはあの願いも叶わないだろう、と度々思った。

「待ったなし」のあとの立ち合いでは、仕切り線に両手をつけて立つ、というのが今では不文律である。昭和の昔、多くの力士は片手すらつかずに立っており、両手をつけて立っていた

大関清國きよくにの所作の美しさが際立っていた。手をつかずに立つときは、最後の仕切りの動きから来る勢いを立ち合いに利用できる。一方、両手をつけてからの立ち合いでは、初速度ゼロからの発進となるため、飛び出す角度はもとより、手をつく位置と両足の位置との間隔などが、立ち合い直後の速度、ひいてはエネルギー量を決定する。横綱候補といわれて久しい稀勢きせの里さとなど、手の位置と両足の間隔が広いため、立ち合いで相手を圧倒することは難しいと思わざるを得ない。そういう力士が少なからずいる。親方衆は「立ち合いのきびしさが足らない」などと常套句を口にするが、バイオメカニクスに基づいたコーチングこそが急務に思える。やや暴論だが、陸上競技のクラウチングスタートの練習なども存外効果があるのではないか。

また大関ともなると、ぶつかり稽古で番付下位の力士に胸を出して稽古をつける機会も多い。だが、自らの立ち合いを磨くためには、相手の胸にあたっていく稽古をも積み重ねばなるまい。胸を出すだけのぶつかり稽古は、綱への道ではない。三十年ほど以前、ラグビー日本代表が相撲部屋に一日「入門」して、立ち合いの稽古に励むことがあった。今の力士は逆に、ラグビー選抜チームに加わり、タックルの技を学ぶことが功を奏すのではないか。筋力的大幅な向上は高いレベルの力士には望めない以上、理論に依拠した技術の修得や改善が、番付をあげる近道だろう。教師の性さがなのか、こうしてあれこれ注文をつけたくなりながら、テレビ画面に見入っている。学童のころ、湯飲み茶碗を手にして熱のこもった一番を覗いていると、「お茶がこぼれてるわよ!」と母によく言われたものだった。四十数年経たいま、中学生になった下の娘が、「おとうさん、コップ、コップ! 水がこぼれてる!」と遠くで叫んでいる。好角家に戻った証あかし、ということなのか。

(国際日本文化研究センター教授)